

3
3258
卷 3
醒齋先生隨筆



骨董集上編 後帙 二卷

東都書肆 文溪堂梓

金匱
明平八年
六月三日
加田縣吉代
長男友太郎
次第
大富賄

わほむ旅
わのれ
わくともみよひとて。いみをやうづんよ／＼も
こくもぬき／＼かまひねけ／＼なたとまとかばひて。いは
ちかむだ／＼もらむば／＼きまですぞなうよたる。まくばりこ
ばらふ白魚鰯／＼すのよせ／＼せんもほのあられ。こまごれかう
ぐへた／＼てい／＼ぼくおはまとはな／＼づ。かるの／＼ふあうと
よせ／＼あゆれ絲／＼は質れなる／＼のり／＼をまねび。
衣服・飲食・調度やうのめますも。身乃ほどよもだよも
せそ。といへりめこらむを／＼まくほんとそもは／＼せ
まちのまことのむ／＼もとをあほす。わゆひなりて。こまみるくま
きまくとらなせ／＼はひ／＼えすやまきわまくと
一わよそ正史實錄のよは。たほやげごとをわゆくとてまく

が聞かぬ事ある事無きが如きのものなれば。時代のたゞ
れどもさうなどかうへんたりとあはばらはまくなら。あはる
たりてし乃だらひむ。そよびとほりてはまのへ。さう
かきへあはるゆは。まじめにまじめにあらはまうら
えははつにあかとこびらうわす。まじめちかむせのことな
じよひては。舞謡マヒラキのいはば。連歌謡詩センガウタシのうらりあり。おけ
よこのな紀たかのきがおはるまゆる。かうぐのたゞりて
そよびらむばひかひ。

一 かきぬみとるふ。ひとみがくらうあらま。ふくまゆふ
ひかみをてはまにたまひとくふくふく。をとせ乃
まくじゆく調度やうとまゆまひ。うきよひみ人代をくはや紀
説かきゆた。かくはくはくのよきあくとくわせば。

一 ひかみをてはまの下。まはくはくひまく。ひまく

あらたむとくははまくは。まはくは。まはくはよくを
あー時代の。まはくあーとくはくはくを。

一 からむとくはくはくを。まはくはくのせーをば。
まのえうねくはくはくとく。かんなまかはくはくがのく
一 まはくはくはくのせーを。まはくはくはくを。まはくは
まはくはくはくを。まはくはくはくを。まはくはくはくを。

一 まはくはくはくを。まはくはくはくを。まはくはくはくを。
まはくはくはくを。まはくはくはくを。まはくはくはくを。

うへんをねらふ。うへんをねらふ。うへんをねらふ。うへんをねらふ。

うへんをねらふ。うへんをねらふ。うへんをねらふ。うへんをねらふ。

一 おれがまく。まかひらうのあめをもかく。まく。や
けなくねもひく。まく。まく。まく。まく。まく。
おほかさんを。おほさん人のまく。まく。せた。おほさん。
ためなむ。てん。ゆく。とばのまく。まく。まく。まく。
でとく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。
うひのあやまつ。まく。まく。まく。まく。まく。まく。
ゆく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。

一 こどもふ先板セシバン。こどもふ先板セシバン。こどもふ先板セシバン。
こどもふ先板セシバン。こどもふ先板セシバン。こどもふ先板セシバン。
こどもふ先板セシバン。こどもふ先板セシバン。こどもふ先板セシバン。
こどもふ先板セシバン。こどもふ先板セシバン。こどもふ先板セシバン。
ままで。ままで。ままで。ままで。ままで。ままで。ままで。
ままで。ままで。ままで。ままで。ままで。ままで。ままで。
ままで。ままで。ままで。ままで。ままで。ままで。ままで。

文化十二年乙亥九月二十五日

醒齋

骨董集上編後帙二卷目錄

下之卷本

- 述杖一
○粥木粥杖祝木ちのたけ棒四
○ひのあの名義ひのあの假名六
○離社離合八
○古書どもに及る離遊十
○室町家の比比離圖十五
○ひのふ衣十二
○三月三日乃離遊十七
○土離圖二十
○後の離二十三
○輪鼓十七
○宿世燒十四
○海老上鰯十九
○酸醬を吹きなれ七
○比比丘女九
○目あらぐり車のよごめ十二
○見世棚十五
○編笠古圖十
○小兒を愛すふバアとよ八
○端午茅巻馬ニ
○後妻打古圖考四
○伊勢小米離十六
○離繪櫃十九
○離枕折敷圖二十二
○ひいふ草二十五
○菖蒲菖再考二十二
○提燈再考二十四
○羽子板三
○れ乳母日傘と云謠五
○離遊の始七

下之卷末

- 勸進比丘尼繪解一
○人形圖并考三
○於國哥舞妓古圖考五
○酸醬を吹きなれ七
○比比丘女九
○目あらぐり車のよごめ十二
○見世棚十五
○編笠古圖十
○小兒を愛すふバアとよ八
○端午頭巾架襷
○糸縷とくろぎのがく
○虫のたま繪十六
○目比十三
○腰鼓兄弟二十
○子日比離遊贋物の比比奈十八
○板風呂湯錢風呂屋二十三
○板風呂湯錢風呂屋二十三

○行燈再考二十五

○きよなみのてうらんの再考二十六

○古画行燈挑燈圖二十七

○胡鬼板胡鬼子毬杖再考二十八

○手鞠二十九

○天和貞享の比の雛人形圖
丹あらうけ
漆田三十
○虫のたれ絹の追考三一
○打出小槌追考三三

○追加姫瓜節供髮葛子節供三十四

もぐて五十九條

○上編前後二帙の引書をそそ三百五十餘種あり。書目とあぐふりとまあへん。
○引書の卷のつりをあくまきに似れども。孫引せざる證とし。孫引へことん
ほくまく。わくとくもやもたうかくせられがゆ。卷のつりで紙あるとぞもへ。一冊の物。
字書のたぐひ。伊呂波ワナウセリのつたうひあり。写本ハ卷のつりのみあくまき
あくまき。あのうえ一本の卷のつりをあくまきへもく。——もく。

○雛の假字の事

契沖雜記小

ひくひくと聞ゆること無なへ鳴くとくとく

古言擧

も此説ふよ

れすや。ものみのひくと鳴育りて名だくる。あくべ。とくとく。又或説小

宇津保物語

葛原君の巻

小

巢葉といで。福ぐくもあくぬひあるもあぐやこれゆく。

ひよとあくらんとあるふて。ひよとも。ひくともあくりのふ。ひくあといふと

ひくあくらんとくとく主かつま

卷

の説

ハ

れらふたぐく。ふくひあくらん

と

かくひくをひきそりあまび。かゑひのゆとかくばまとふとかけるハたぐく。

とくとく。おれ此説ふよりて。あくまくひのゆのかかをわらふれども。釋日

本紀

十四比賣那素寐

の釋小引

私記のことば。比比奈遊ひひかま。とあり

江家次第

立太子の條

ゆも比比奈ひひか

とかけ古例あれバ。ひくかと

かくもひくきよもあくばと。されどひくと鳴義ききとよどむるとき。

わよか本あり。ひよとりへ畧言はりげんごを末すゑあふ。鳥のゆを。ひよ。ひよ鳥。

せうへとひと。ひととねふかけをいまとあへと。あきのゆも人形
のたぐひとちひくほくれの物のとひとかけべ。本と本とせした
似て。又人形のたぐひをひとほぞそしも。ふもきねよへとくか。
なまく齊宮女御集卷下小ひふ社とあれど。契沖師の校本と云れば。古本
ひとやうとあるとて。ひきあはり。又御堂関白御集のこぶがふ。
たまのまれゆとす。ひとやまわせ族すとそとあれど。下の假がまふ
ハ。こまやのゆひとやにまくとあれば。よふひあやとあらんねぼうかくをお
や。かくあと本ふせるにそ。ひとやかあやうがひまきあく。又ひとかく義とせ
る説とせがりて。和名鈔小比奈。とあると本の名とせんとだ。玉かつまの説のごくひ
り。とひまといふれ。ひとやかがまく。おれがわらうかくろふ。いづれをよ
ともさざめか。かほたる。證のりをまつてあまく。今おやくひあ
ゆかどりあれば。おれがまくひのあとかを。ひまく。と筆ひつのでたかまく。

骨董集上編下之巻

江戸

醒齋輯

山東庵

○毬杖



江戸

醒齋輯

山東庵

正月男童のりて打ふ毬杖。え打毬の変風あるべ。打毬の馬上よ武事をあらつて
業よ。和漢とも小其事ひ。此方の打毬を考る。小萬葉集卷六神一龜
四年正月。數王一子及諸臣子等。集於春一日一野。而作打
毬之樂。云上とあり。神一龜ハ聖武天皇の年号也。吉日を御りて庵也。

但書紀讀紀後紀錄本續日本後紀卷三秉和元年五月の條云戊午按ルニテテ天皇
ホヨ奇越のブランズ。仁明御二武一德一殿一冷四一衛一府一馳尽一撞ニノ馬一藝及打一越ノ之能企
和名鈔雜藝類云打毬。萬利。利。劉向別一錄云打一越昔黃帝所
造本因兵一勢而爲之同書雜藝具云打一杖。打一越曲一杖
上越と打杖の名也。○唐土より黄帝の時始るといふとぞたゞきもらずす

事物紀原 卷三 宋朝會要を引て云

「越一杖非古。蓋唐世尚之以資玩樂」也。唐の時盛ん。聖武天皇の御時へ唐の玄宗の時よりされば打越のかみづれ。和漢同時とりよべ。○唐の僖宗殊よこを好めり。僖宗帝へ。御閑の貞觀仁和の比小あされど○遼小くられを善敷事者あり。

あまりと

遼史

卷一百五十五 臣傳下ニ耶律塔不也。

淵鑑類函

卷三百三十一 巧藝部八

於上凡馳騁鞠不離杖と云えたり。源平盛衰記 十四云「法師の首を造て。打越の古事よりうびよ。詩篇歌あるをあす。我たれどものうりづらうくれべらふ。举ぞ。○こそ打越より変じ別れて。越杖と稱。一種の玩具よみそり。うげの比す詳うらど。其きごくハ宇都保物語 小字えたり。中比の物よ

ええへハ 源平盛衰記 十四云「法師の首を造て。打越の玉を打が如く。杖を取てめち打うち打蹴たゞ踏たゞ。様々小たり。大衆兒共態と。此玉うよ物と向ハ。是ハ當時世よ用え給ひの太政入道の首也」と答。平家物語 卷文覚上人

「舞岐國へ流されける時。後鳥羽院を越打の冠者らそゆとめうけどのうちひらうこことくる所よ。此君あまうに越打の玉をあせさせ給ひ。文覚うをうかわく。ヤリミナリ」とゆり。義經記 卷牛若きぐのまうでの段云「あとこうやう。まうちうの玉の玉の玉の玉をとて出。木のえぐにうけ。ひとつとくがおげりうぐくと名付。一つとくが清盛がくびとそゆけられける。云。袖中抄 十之卷 親顯昭撰たまきちの條云「十節錄。黃帝云。取蚩尤。頭一越レ之。取眼射之。云ニ越杖是也。云ニ以彼例漢土。年始用一件事。國中無凶事。仍日本一國學其例。年始打越杖云。」日本歲時記。改年月初月托宣。謹き。徒然草 下之卷 四十四段 「さざらやうへ正月小打だ。さらやうを。神泉苑へ出。て焼あぐる。云。」托学往來 印作玄惠法 改年月初月托宣。神泉苑へ出。て焼あぐる。云。」神中抄の作者題跋。後鳥羽院の序時の人。當時越打云。まよ。年始よ越杖を打。とされば。正月の遊びよもよもとさる。

詞花堂模倣

○打毬樂之圖

宇都保物語 祭使卷よ云 うまきみ
騎射

もく。と後りども。こまくこととて
舍人和大臣

すひゆそぶ。かうじのかくふ。かやいのる。

玉を。さわりどものあくふうが

て。と後りども。まく杖を

りらで。うらをびて。うちからといまひ

のをぶ。云に今。の本よ。まく杖を。まく帳よ

作。めやまれ。○按。よ。されハ四月を。うのと

す。まくの事。うそく

ら。舍人和打毬樂のまゆを

く。あく。まく。とまく。これ

玩具の毬杖のり。ぐんまく

。されば。玩具の毬杖ハ打毬和

車。よう。しよのう。打毬樂の

玉を打。をまく。ひだる。う。起。う。あ。べ。

そのあくよ。毬杖の玉とのひ。玉打。も。りひ。あ。う。打毬。の鞠。よ。玉。の。欣。よ。ハ

むらざれ。近古の。毬杖の。玉。も。た。玉。の。形。寛文六年の。訓蒙箇彙。よ

載。る。箇。や。に。物。を。え。と。考。め。り。の。べ。○。の。す。へ。騎射の。後。ま。か。ま。く。ぞ。打。毬。

樂。を。奏。し。り。る。源氏物語。蠻の。卷。よ。五月。五。月。の。節。會。よ。騎射。競馬。を

か。ま。れ。て。後。よ。打。毬。樂。落。蹕。を。ど。の。審。樂。ゆ。く。と。と。え。た。花鳥絵情

○六月。武德殿の騎射も。唐人の裝束と。馬より下る毬子を打つ。也。打越と云。其時奏する樂を打越樂と云ふ。とあり。

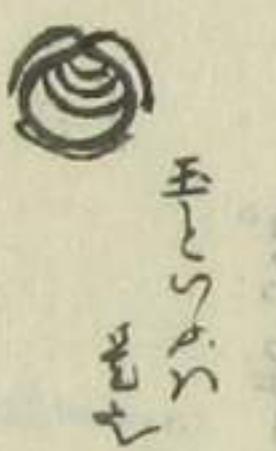
○後のきの物よんえいへ 下学集
支安元年ノ書 「毬杖」正月所。
卷よ云「毛縫うのひう。美帝とりの内門毛縫う。中畧。蚩尤が射分をばぶ
げどにそらちてひくものと木丁の毛縫う。正月よりかのまゐりの中の人見を
ぬきて。木丁の毛縫う。とよせど。云」と。説よくわたり。かくらん
於二歳初。皆擊毬爲戯。のううたる者。
世謗問答。木丁又作る。其又備字で。

○盛衰記 義經記 文安三年春六月及打又作る
塙囊鈔 卷六第六条 及打又作る
中山傳信錄 卷六女子。

○近古制毬杖。のととぞ
訓蒙画彙 所載
寛文六年印本
のととぞ

○和漢三才画會 卷十七 嬉戯部 すも。如此古
制の箇を却て云「接毬打之遊戯。和漢共
其來尚矣。近世惟小兒爲戯。毎正月與
破魔弓同弄之。猶近年不用之。故本式
毬杖見者希」此旨を編一時。正徳二年や
くれば。古制ハ當時もあつた。者希よ。今の
制のぞくにありしるべ。さるから今之制ハ。が
ひのえ補以後の物とあもり。

○京ある。青李庵主人云。今京師の俗。男男女女。小兒とも生きて初の正月。母方の親里
あどくり左の箇。今之のぞくに毬杖をかうて祝儀など。是何の所用もあり。たゞ



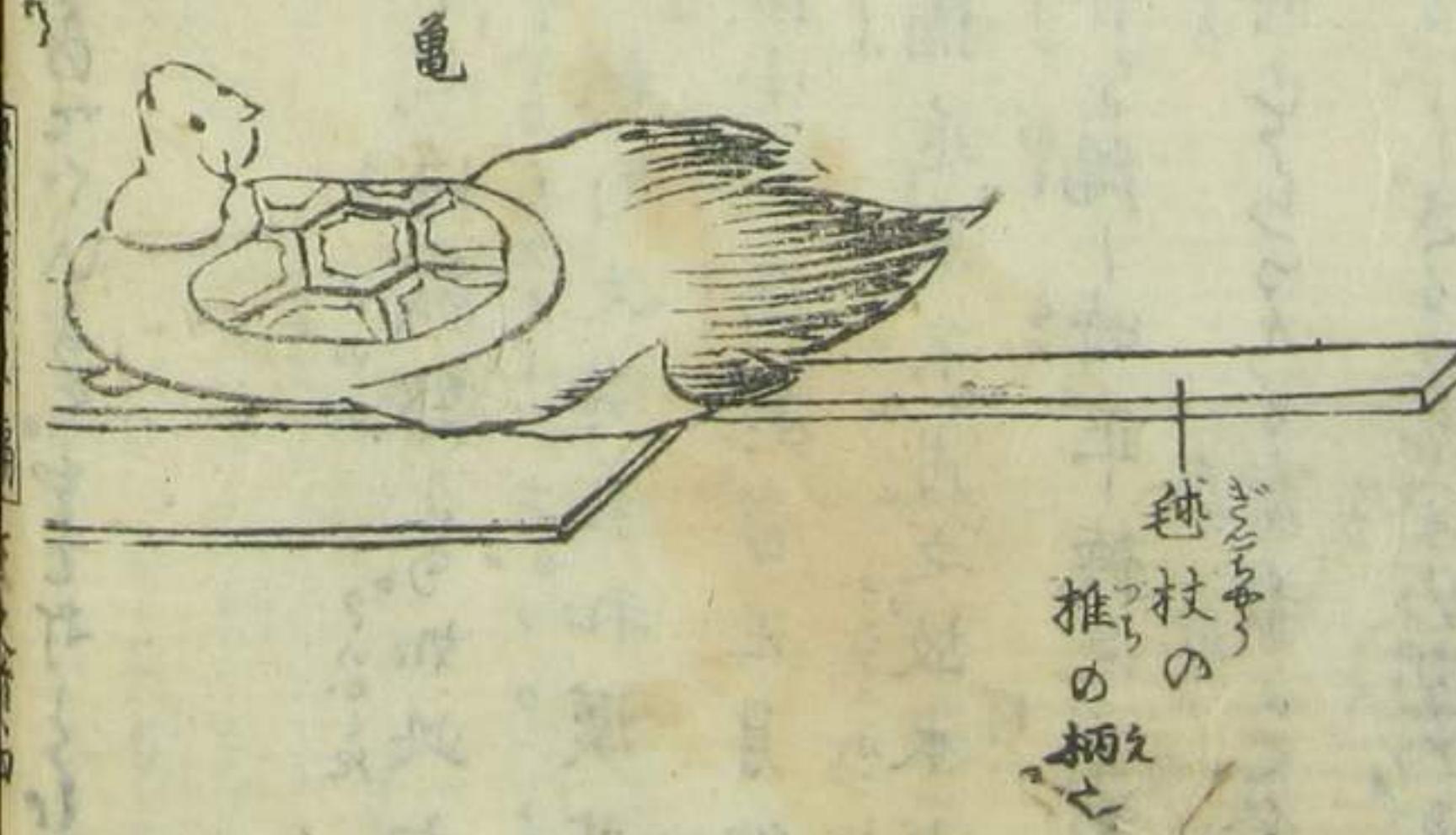
和漢三才画會 卷十七 嬉戯部 すも。如此古
制の箇を却て云「接毬打之遊戯。和漢共
其來尚矣。近世惟小兒爲戯。毎正月與
破魔弓同弄之。猶近年不用之。故本式
毬杖見者希」此旨を編一時。正徳二年や
くれば。古制ハ當時もあつた。者希よ。今の
制のぞくにありしるべ。さるから今之制ハ。が
ひのえ補以後の物とあもり。

まことに。さうに
 まことに。小児の月をあぐさむるのみ。次の年の正月へ男児はとがり、女
 おもて。女児は飾花をかう。醒えぶり花といひの宝曆以前にあじて
 えら。そ等のからとおせど。小児二歳をめざすとどる。併此事をくじくと
 まつり。志の希よもどる。とく。されば越枝うりとも又今行ふ
 不用もあつた。年始の祝の物とあらじ。

○今制越枝高

まつりのび
 椎(え)柄(くわい)の端(はし)とどり
 ワ(わ)曲尺(くし)一尺八寸(はしゆん)許(ご)

土(ど)をつくる紙(し)と剪(き)胡粉(ごん)丹(だん)綠(りょく)青(せい)
 わ(わ)もそらう。粗(そらう)稚(わらわ)よつてうな物(もの)とあらじ。



滑稽音雜談

卷之一よえ「當代」

板(いた)貰(う)い 鶴(つる)龜(かめ)松(まつ)竹(たけ)造(つくり)て
 繕(く)とひろひさまらひと。此(こ)脛(きのう)。
 正徳(せうとく)二年(ねん)漢(かん)三才(さんさい)畜(ぶつ)會(かい)と同時(とき)の
 摂(せつ)。當時(じ)はいへんば。正徳(せうとく)の前(まへ)。
 まつり今(いま)の此(こ)制(せい)をすこしあるべし。



○ 始玉ぐ

ぐるの名へ古き書又いまぐらんあくらば。近き昔造を始たる物ありべし。

越杖と同物ともいひがことえ來別物也。

本草啓蒙

卷廿四云「碌碡ハ田器也。秋風の

如く六稜ゆ。兩頭又索ありて土上をひたて地面を平よどる具あり。三才

畜會授時通考等より焉を載也。

本邦正月兒戲の

才畜會考より。年始より農業のひととを農事をもじる意ありべし。古画を見るかぐる紐をつけて。

地上をひく体とかく画り。是田畠の地面を平小どるのまねびきらん明王塲が三才畜會考より。碌碡の長さ三尺半と大小等からば。或は木或は石をりそほす。畜力を用て田畠の土を打。水陸通じて用ひとされば馬耙のど、牛馬の尻ふけりとひらかる物うべ。○ぐるの制作を考るよ。兩脇よつけたる戸車の如きりのへえ地をひ一料の車とあじうべ。あくるを後ひ車をひそひその車をとく放ちて。あきのとすれど左又牛ヒ畜をえと考へせよべし。

○ 羽子板

二

正月女兒のりをあそぶ羽子板の始詳あらど。按るよ

下學集

羽子板正月二

かくのぐるあざとづけ。前よりあると下學集ハ文安三年の春と曰ふ羽子板也。今文化十年より。がくと三百七十年ぶりと前より一物也。その前よりそれが比うりあり。放つてく

蓋裏鈔

第六卷

爆竹の條よ

羽子板

とえ名のを載たる。文安三年の春と世諺問答

天文十三年書上の巻よ「向てえをさあんりくのこぎのことひてつたむりうあるひ。答これへをさあんりの蚊ようれぬまうひうあり。秋のいづれよ。蜻蛉といふ虫生きふ蚊をどううの物うまこときのことりの。本蓮子うどをとんやうからすてものをけたり。これを板もつきあればあつる時とんやうづの

すありこそ蚊をかそれへりんなりよ。こまのこととほきゆるうり

林逸節用

集明庵ノ各羽子板・胡鬼板・トキ」とあり

日次紀事

延宝四年ノ各正月の條より云

男兒擊毬杖一玩弓一矢一女子動羽子木板

板弄絲毬及毬杖部里

羽古義

十二月市中の賣物をあらべらる處毬及毬杖部里羽古義

板」とあれば胡鬼板小作るハ借字より羽子木板の上界歛羽子のことを胡鬼の

ふといふも板の方よりれど名歛ともあもつれど下学集双下の古書小羽子板

胡鬼板とあれば後の日次紀事を證とてハ決り。又下古書をたゞりぬべ。

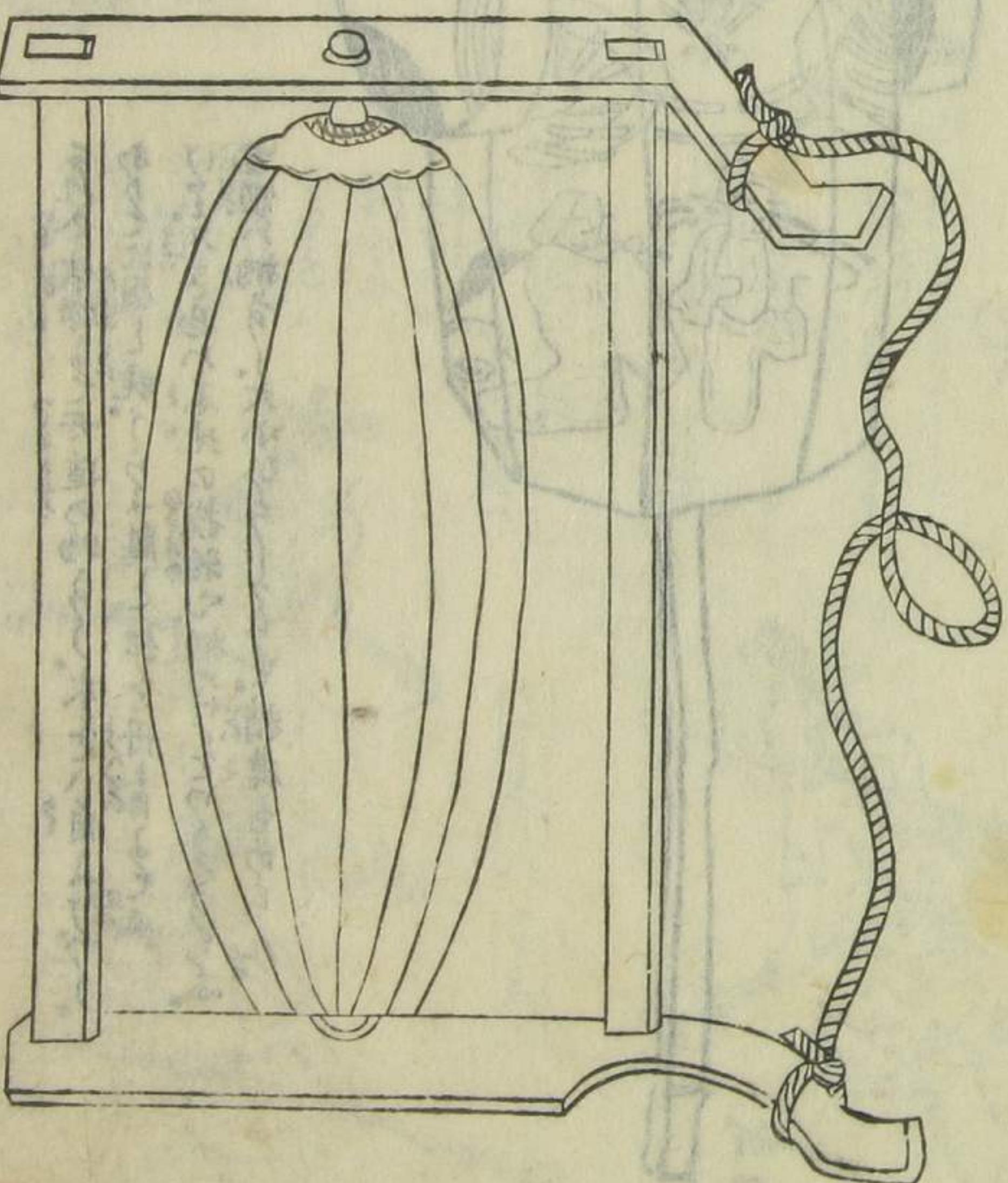
○さて私可多典方治三年印本田舎人京のりして公での持ゆハ笏をつとて羽子板をやうんといひ一突話を載たゞられにすと。古制の羽子板の笏又似たる今のは笏小

中がへばに形ゆあらざとかりひしよ。三春羽子板とりふをつとめ。つとも笏又似たるとべ其古制のきくうあるをあれど下に坐と首をつとべ

(1)比叡山日光山の外諸別の高山よりある木の子をつとめ。又らだめとうも玩具の羽子又形の似たる。ひまわりの名も。巌山等にうらわしくりふとひふと

○
○ 碣毒圖

和漢三才圖會
二才箇會
三才毒の會
高麗十一の卷
夷果立歛の
絶え
也本朝田家
末見と
たり



署の松

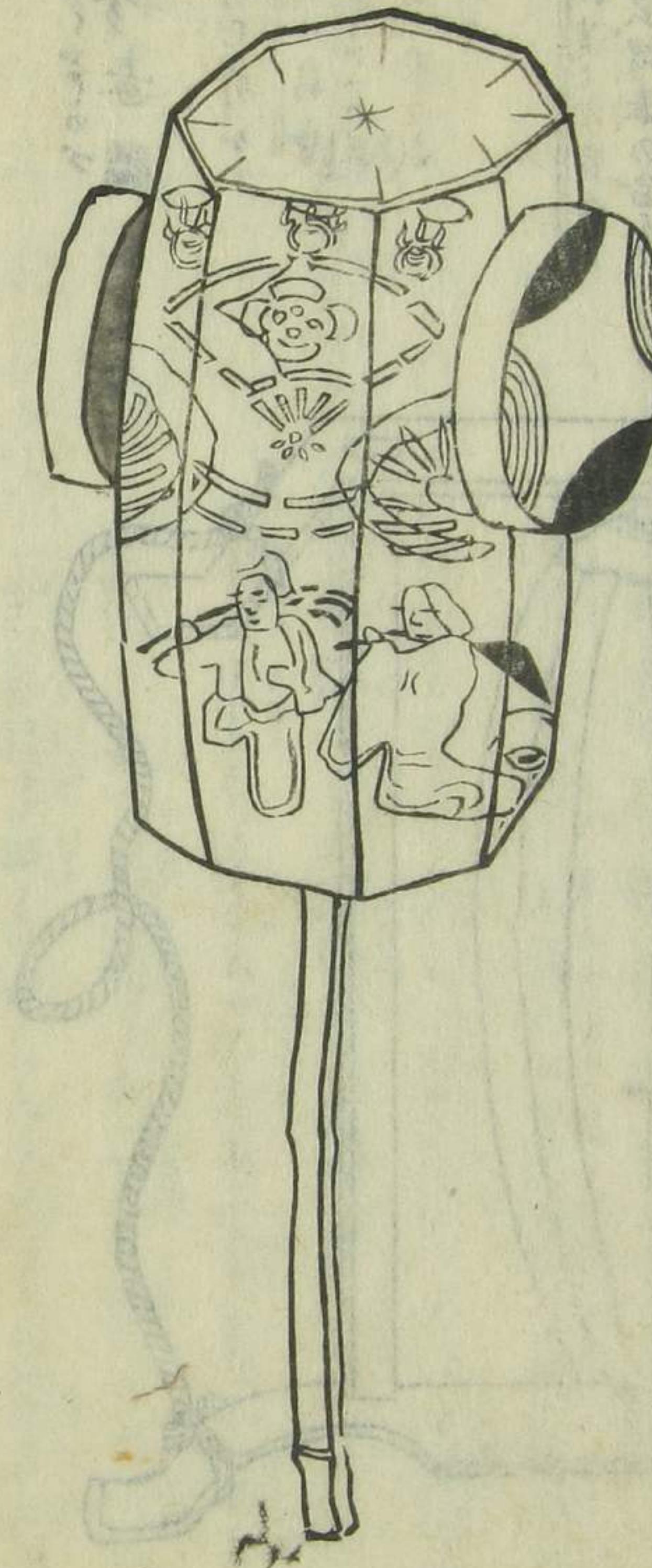
増山井 寛文二年刻

すだら年うすと云居うなづいたる。その義い味い考。

明王坊が

○ねまぐの扇

これ今京師よりて作造の物あり。木を八角よりづり
ありてに尉と姥。うらよ鶴と松を丹青より画
け。もきわら本地の物也。柄ハ竹をくりてある。ふ。
古制ハ柄す。大小ひくらべ。精鹿もあらん。



扇子よりくびの長さ立す木
柄の長さ四寸半

○がくへをりくねば古扇を
やあらもくよみみ翅を
つけく詰とり休めり

京童

玉ハ
もみらこまたうらう

万治三年印行

世説問答

此扇を以て越前とからいと別
あるを知るべ

圓晉の比印行
一休もく

明治四年印行

貞享五年印行

日本暦時記



當時の
さゑを
かきたゞ
じれべ万治
の比の證と
きくよ
たゞひばく



當時の
さゑを
かきたゞ
じれべ万治
の比の證と
きくよ
たゞひばく

○羽子板古制

これ奥列ニ春よつて傳へたる古制うつる
制作質素すくこのうち古雅あり。裏立波に
鶴をつらむ相船と云ふたる。
本地より胡粉をぬり墨丹緑青ホコロうじて。



曲尺五寸八分

秋山の豆下を量

ゆつと一分五リシ
此野本地
ミウラ

○粥の木・粥杖・祝木・やいなげ棒。四

正月十五日。粥を焼たら木を削て杖う。子りぬ女の後を打ひ。男の子を産と
り。それと古に俗う。御杖と別とし。

進。かの木のまきやくして家のかたら女房あらぬうがよを。うれどととうい

もとつてようへろを心づひたるけ一きもあくまにひにとけてるよ。あらん。

あらんとちのまきうづうありとうちらうらひたるものとぞべー。ねーことおひだ

とこつせ。云々 独夜

四の巻

正月二十九日

餅 駄
粥杖 大根

用

十日

大根

又とくとくととくいへたらと西ひあらうとぞ。きのくかうくうとゆるを。大根

とぞ。うれしがひて。まろとわらまうとぞ。たれもすくうけん。縁よもよある

る。あらんとくとくの縁んとあらんとくの縁。まみ打ひたらひたらよ。云々

上 正月十五日云々。まこととやくとくへうひそめ。ひごとく

内侍日記

卷 上の 宝治三年

たむるべきあごひて出給ひまちとひうはべ。づぐもとまうりで旅
りんをあらねばゆとやゝ人をたへせんとそ。云々。あまうどのかくれよ。少將。
あまうど。醒云。考みを。宝治三年。後深草院内年。うめひーうじ。も。りうほをさ
さだ出候も。云々。アグモトリのぞじば。後上のうづようろくういーとみ
なまう。权一納云。ナリ。かくとあけじもねへ。あまうとあきほにほえ。小あきつりと
アグモトリのぞじば。あまうぬとあどよ。表もあびとて旅
ぬ。いふもあみひ。づひようづのうぢの門乃く。とて。を旅ぬとす。も。がさう
あくねくと。あろまうとす。に。まく。ばえさまく。をひつまと。權一納云
つうける。少將内侍。

うちわびねかく。れはえられば月をみと名とそむ。タキ

下の巻。建長二年正月十八日の余。も。か。の枝の木。アスカ。れど。か。う。ま。る。と。と。う。に。文。張。け。れ。ば
から。此日記。ハ。枕草紙。さざうも。う。あ。と。ニ。百。年。か。う。後。の。物。あ。と。ど。け。由。枝。か。の。時。も。良。い
ま。う。れ。ら。を。か。り。ひ。く。と。古。代。粥。杖。打。た。る。さ。み。を。知。る。べ。○。後。の。世。の

物。よ。え。の。下。組。四。の。十。八。日。粥。の。杖。よ。て。打。古。る。て。勘。禁。中。今。も。粥。杖。よ。く

女房。を。う。と。が。男。子。を。生。ざ。と。そ。う。と。越。前。う。ど。に。は。こ。と。ぐ。ー。き。と。う。り。本。文。ハ
ま。ち。う。き。也。天正十八年

日本歲時記 卷之二 貞享五刻

正月十五日の條。よ。云。【今。日。粥。杖。と。】

松枝。柴。す。ど。よ。て。女。の。腰。を。う。と。が。み。を。う。ひ。ま。と。い。と。そ。今。も。と。る。み。あ。り。但。し
今。い。小。兒。の。戯。事。と。す。と。云。北。國。よ。く。松。の。枝。を。五。毛。よ。づ。ろ。ど。り。て。そ。見。よ。そ
女。を。打。所。あ。り。西。國。よ。く。捧。よ。て。女。を。う。と。呼。め。う。云。云。同。次。紀。事。追。加。云。信。龜。二。
等。の。圓。よ。於。と。漆。櫟。木。を。以。て。其。長。サ。一。尺。二。寸。許。よ。切。上。下。よ。り。削。掛。く。先。の
方。よ。左。卷。取。除。い。其。模。様。向。残。る。是。を。号。て。沸。祝。棒。と。云。新。婦。の。家。每。よ。入
て。新。婦。の。腰。を。打。四。童。の。戯。也。云。【此。記。ハ。延。宝。貞。享。】
造。ふ。の。明。朝。ま。じ。も。ま。こ。え。け。る。よ。云。日本風土記 卷之二 時令の條。よ。云

元宵 正月十五。云。ニ。但。街。道。鄉。一。村。兒。一。童。年。及。十五。十。八。

九 已 上 者 各 取 柳 技 去 皮 彫 成 木 刀 枝を木刀とモテタラ
外 纏 手 刀 上 用 火 燒 黑 去 皮 以 分 黑 白 之 花 此說古の日次紀事
名 曰 荷 花 蘭 密 ト 子孫のミトトコロノサリカラモテハヨリテナシ
次 集 各 童 手 執 木 刀 隊 騖 手 途 元 有 姦 久 無 子 之 婦 トカナス
將 木 一 刀 一 遍 身 打 之 口 念 荷 花 蘭 密 必 使 此 婦 當 一 年 有
孕 生 男 云 ト とえたり。されば明人此方の事を傳へて云々。○つひがいもん。婦
入 養 草 貞享三年印全浙兵制日本風土記を一晉の名とす。ひがいもん。二書の名あるは梅園日記。日弁ビニアリ。婦

雷 盆 檀 の ごく あら 丸 木 に 鶴 龜 松 竹 宝 づくの繪を彩色幼男ども。

いそゞ産せぬ新婦を打祝ひあり

書言字考

弱 一 杖 北 越 人

謂 之 枝 木 年中風俗考 貞享四年印 本・上の巻。正月十五日の所云「だののどの中。
大の子と云義也。陽相を作りて童のりこゆそびとて女を祝して大の
きの子を持たまくと云義也 年中故事要言 享保三年印本巻二 云「美濃國沐官の

材より。正月十五日より新木枝を削て其削骨の縷の如くあるを枝の頭より
て名て削掛といふ。是より女を答て大の男十三人といふ。然ども其義を知る
者す。是も男子を生くると求る祝ひである。枝の遺意す。○さを下す
盆を生どん北越うそ祝木と云ひけり。○傳へて今より造る杖ある。勝軍
木とある。或ひ胡桃木と造り。春初男兒ある方へおくりつゝと餅花どもよ
り所より掛垂小正月よりうそて男児らとをだらまきて新婦あるあよもき。
新婦の腰を打まひびをくして子を孕まひひと。又祝うと彼地の方言
をよひら是あり。勝軍木と云ひ白膠木のことぞ。

和訓釋 めめほどの翁よ云ひの諸國とも新婦を送へ正月よりあたまきと
稱今りその神官あくよもめり。云々

○祝木扇 いのちぎのづ うよ扇 まくらん北越よつす
正月はえれりとつる條よ「十五日せめにとく。さきつゝう
ちりてすをほさんじふのちりつりのはふみそ。一様もありて。女房元の右
のねむく乃うを。二ばくそとけうちひ。うの拂杖よりうひが。左
肩かた上うえの拂杖よりうひが。左
ひらとそくをかうれりて。春乃時ものいぬあと。緑みどり青あお繪ゑ

ゆくとく。東山殿のこうのすく。めの枝の遺風いふう。のうれ。正月に嘉例かげのやうよあり。と
われもかの枝の遺風いふう。右よ引ひき年中故事要言よひ。美濃みの。と削掛くずかといふりのイ
裁さいをべ。○うれよつきそ。正月十五日おとせ軒けんみけ。けづりと云ひの考かげ別べつより。中編なかへん

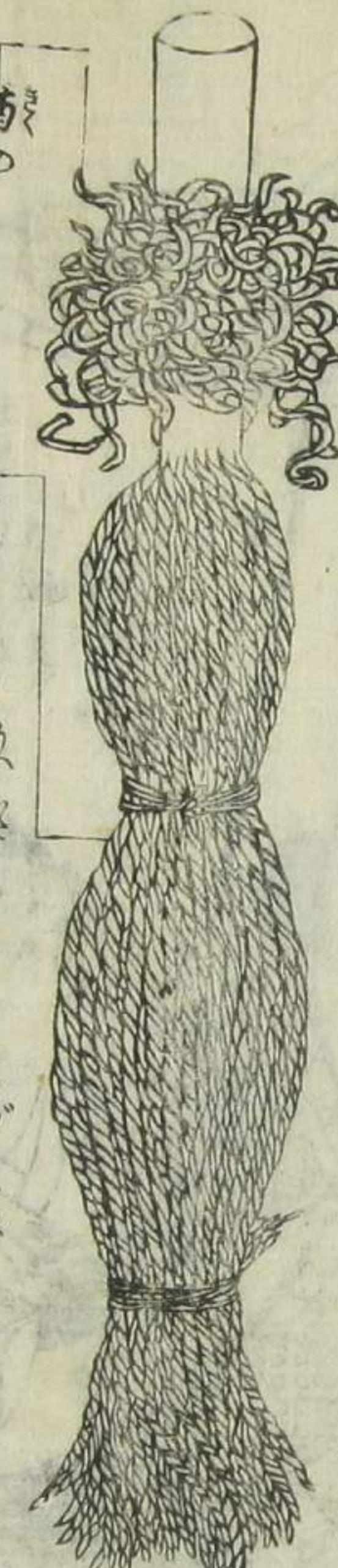


此のひよ四寸余

此のひよハオバカリシカヤ

簾中舊記れんちゆうき 正月はえれりとつる條よ「十五日せめにとく。さきつゝう
ちりてすをほさんじふのちりつりのはふみそ。一様もありて。女房元の右
のねむく乃うを。二ばくそとけうちひ。うの拂杖よりうひが。左
肩かた上うえの拂杖よりうひが。左
ひらとそくをかうれりて。春乃時ものいぬあと。緑みどり青あお繪ゑ

ゆくとく。東山殿のこうのすく。めの枝の遺風いふう。のうれ。正月に嘉例かげのやうよあり。と
われもかの枝の遺風いふう。右よ引ひき年中故事要言よひ。美濃みの。と削掛くずかといふりのイ
裁さいをべ。○うれよつきそ。正月十五日おとせ軒けんみけ。けづりと云ひの考かげ別べつより。中編なかへん



菊の
まみの
ミカサ

○おいたけ棒の扇 いのちぎのわくうなげせん
又祝儀棒いのちぎのわくうなげせん

柳やなぎをけづりて。やのことを。ことくに
制せいる長ながさかくそ曲尺三尺
あくひへ一尺四五寸あるもの
長短ながたんさくひへくわん

今いまの世よの年とした志おものひとよもひとよ。が乳母うぶ日ひ傘がさよそそくちだる者ものぞとくとく諺ごんゆ。昔むかの乳母うぶ

をやつすかくかくのあうざんざん者ものの思おもひ。日ひ傘がさをよそそくそくしたる者ものよそそくそくのあくら
くま。丹青あかねりそくそくの後あとをあきそくそくとて菱川ひしあわが後あとをあくらくらえて。延宝天和貞享とうぼうあわくじょうの比ひ

五

五

日本靈異記
上卷二
離ノト訓可考

○ひひみの名義、ひひみの假字
和名録 離 和名比奈
契沖離記 離 ヒナ
ひひみの名義をとり玉の御ま 十人の歌をひひみと作りて、物語
がくともにひひみととり。これからひひみとされるを、ひひみよどりとしる。
詩哥をあひる。四時をものへど。女房をふくらうづくとひひみよどりとしる。
引てひひみよどり。假字ひひみよどり。物の離歌といふ。
ちひみく物へたるよりの名す。 やれび離の假字ひひみよどりも決がく。

○離遊のくづめ

七

書紀 五 索神天皇十年九月、童謡よ比賣那素寐殊望 古事記より
くる詞なり 日本紀 卷二 二十四 よこれを新一と云「私記」曰。爲兒一女之
避今棄比奈遊也 とあるをりとこれをひひみとびのりとす。ひひみてあり



わらわらひひた。されど世まぐものしが。今はえと离すのものこまへ。

○か乳母曰金華と
ひひ訪のりと

され今より百七八十年を

前 寛永のころの後
昔の民の女の貨幣の
風は今の田舎の女よ。
かのうらのられるを。
け古画とそ
あべ。

内斎權義

古事記傳

卷二

比

賣

那

素

寐

契

沖

媛

那

素

寐

比

賣

遊とて天皇の美女を集めて宴あそび給ふを云ふあるべし。又も比賣那素寐ひのね様ひの本よりあらば。○又ひよ母三十一代敏達天皇三年。厩戸皇子聖徳の幼くかとまゝ夕時より始れりと云說近き世の物よりまことえれどごと或偽書よまだひたる說されば。とるにちたらぬひことあり。それが離托の始詳あらば。

○ 離社離合

八

齋官女
中勢集
の古事記傳
考証
此年
末摘花の巻
私記
比奈遊
時
天暦
年
八百六十余年よりて。

按ニ
離車の形
カタカの形
ひいみの車
うつぶの車
のあ語

歴哥傳
仙ヲ

末摘花の巻

○ 源氏物語の離遊

九

按ニ。當時正月八日。

御民衆のうちともよ

紅葉賀の巻

紀日本
私記
比奈遊
時
天暦
年
八百六十余年よりて。

さくとひいみのものにあへて。あら波にそひそぞ船に立ぬらくみまわゆくも
をとこ天暦へ。源氏十八才へ朝拜。十九才へまづ旅とて。正月元日朝顔。さへのをとて。
宋のうへのあへて。まづ旅とて。正月元日朝顔。さへのをとて。
三尺のまづへひとまづひよ。あみくあらひとて。すらひさんやどもをはくと
あらめてまづるを。形とて。ひよの屋とて。おせたまをあそびむうげあり。あらまよとてぬきか
追

それをうがら行ひければ 大君とおる女のワラハがひきのを つうひどるそとせひとだ
いととあやひたら。けよりとくろあた人のあとさすもねられ。まつろむせふく

らん。あひとゆくと。あい続ととと。西月一日され、出ゆけりてひと不せよと。
源氏本内出ゆふりく かほせなし 帰者あどききくへまわらをよすにひぐもとまうれば、姫君はもとまうじくと
ひそまくら行ひゆの中の源氏のまづくろひとく。肉よもあくせあどく行。

源氏本内出ゆふりくのあを や納言房 あをびひのまづくろひのを。云こ。時家のうへ十一からすれば。めのとゆ
きをきたをつまめあをとち。あくらるをうれば。古代のひのまづびのまづを。今日のまづと月季
そちを。今世の女の匂のつゆのあをびよひうらみすみうちと紙ひをつき。こまく某。
れの某あと名をつけてよしとへ。家もとしき作をよみびとせよついたぐら。今世のひのひみねびわゆつてゆう。よみど。とあるの巻。けどうへうり

ても。ひいなあをびのつゐやうを。ねんじうよまつれあり。云こ。おとくの雲
井の店の姫君と十代のまづく ひいみの匂いとあらかんせどひよ。よ
よみと。よごみごちよどふとあきとあくねば。もうあき花紅葉よつけ
ても。ひいなあをびのつゐやうを。ねんじうよまつれあり。云こ。おとくの雲
のよそびりひひくとぞとく。

人そりてかみかみをよしにまわれば、さうとさうとあやひたらを。やくく

らを吹きずりやり。うりうり。けおとのあらうひよびうそやり。あどくまづく。ひのくら
くさう。源氏のちん子夕夢の君。明石の姫君の方。ゆべのせがのまうひととひめ君の
そめくらひのひよみくら。もくられくことひもとそ。あーのひめ君。此時セオをう。ト。

君のまづくのアのあもとあをび。ひのまづくをあをび。云こ。せうのまづく

あげまたの巻。あろきぬぞどものやうびうあるよ。あそまをかへすりも。あくにとも
あたひいをあせたらとども。云こ。うとく。宇派の大姫君のゆまひよをもとまくかふ

みまむせんいつらとのまづく。ひくらひまづく。よやうそ。ゆまくよまくとまみく
ちのひよせん。ありとまづく。

○ 古書ども小見学離撫くよぐ

十

宇都保物語

樓上巻下

琴

琴

よきみせんいつらとのまづく。ひくらひまづく。よやうそ。ゆまくよまくとまみく
ちのひよせん。ありとまづく。

大宮へあざなの店ひもとせ。卷づく。大宮へあざなの店ひもとせ。卷づく。

云い。六方よりあづく。母母ハ、巻づく。

ゆの太宮と行けられひなやうびを。おきうた捨を。云こ。母母サ、太宮へおおと

野分の巻

タ秀房

雲

ひいみの匂いとあらかんせどひよ。よみと。よごみと。よみと。よみと。よみと。よみと。
ひいみの匂いとあらかんせどひよ。よみと。よごみと。よみと。よみと。よみと。よみと。
ひいみの匂いとあらかんせどひよ。よみと。よごみと。よみと。よみと。よみと。よみと。
ひいみの匂いとあらかんせどひよ。よみと。よごみと。よみと。よみと。よみと。よみと。

野分の巻六八月

とぞ。又云「雪山つゝらせ詮てひいみわをびうどりうともほ」と。みを

なぞより詮云「こゑきのひみせびくうなまの母京極のえふ。さうぶのひもあやけときとあるの。母京極のえふ。さうぶのひもあやけとき。」

りうともにひみせびくうなまの母京極のえふ。さうぶのひもあやけとき。

○ちびたの巻のひみせびくうなまの母京極のえふ。さうぶのひもあやけとき。

榮花物語

才八

花

施

の巻。寛弘五年の

不よ云「まことひみせびくうなまのつむぎうみて。ひいみのゆう

ひいみのゆう。まことひみせびくうなまのつむぎうみて。ひいみのゆう

ひいみのゆう。まことひみせびくうなまのつむぎうみて。ひいみのゆう

の春。御堂房白道長久の御子。中將長家。次年十又六歳。房主。内侍

いとこうづねがくかくとひめ。鶴のわどよかつらうよ。侍從中納言行成。このひめ思

御年十二をすりあるを。あるを。あるを。あるを。あるを。あるを。あるを。

うめひりを。詮れば。御堂房のぬ視よ。ひいみわをびのまづをかう。あらん

とのひみせびくうなまの母京極のえふ。さうぶのひもあやけとき。

一對のひみのせうきうとりふ。是よ娘一品官。

夫君のかまくひめ。年十一。を。え。そ。まくらせ詮。ひいみわを

よ。ぬ。ぐのゆゑ。うらわじくじくじく。あらうど。ぬ。と。み。う。く。え。さ。せ。詮。ひいみわを

を。を。う。と。あ。う。が。う。げ。う。と。ど。な。と。あ。う。う。詮。ひ。う。ら。を。う。お。い。や。う。う。う。

う。

詮。物。う。云。○才廿ハ若水の巻。○

才廿ハ若水の巻。○

增鏡

四ニ御山の條。仁治二年

四條院代席。御年十一。

詮。を。ま。ニ

。先づ元服しゆひ。故撫政教実久の娘君。九才よりすりあひが。女侍よもやりゆく所
ぎくらの奉をりる所よ。「女侍もまごめくちひまうかとすれば。おひみあひの
すうふそそえさを挂ひける。云」源氏をめぐる此うに治の年をもとめれば。がまを二百三
四年をう後されど。当時のひまねびゆがきどあるともう。
これらの方をかうひまくして。ひまくめひのひまねびのまゆであるべし。

○離の調度

紫式部日記

上 東門院

卷

宮の清

リテラス

まろあひへ。一 納言の君ひんがにまわりそよ。ちひまたれだい。まくらども。ぬも著
墓
のたのむらぬあく。でも。ひのまねびのぐとう。具具
のまくらぬあく。とひまくられひまねびのぐ。とひまくられひまねびのぐとう。
勝浦 鳴尾 濱のあめ。すく。あく。調度

枕草紙

十二

まくらぬあく。とひまくられひまねびのぐとう。とひまくられひまねびのぐとう。
とひまくられひまねびのぐとう。とひまくられひまねびのぐとう。

濱松中納言物語

二の巻

天延三年五月四日

雨

處

物

ともみて。ひまわそびのやうにあく。ひく。ち。古骨とも見えり。よ。ひま人形も。その
調度も。うつたりのにたとへり。そのうちのひま。宮中中すくとみに。うつりのむね。挂ひされば。うつく
く。造り。うづべ。うづべの民の童のひま。挂ひれ。ひま。小朱ひま。ひま。孔ひま。草ひま。ひま。と
きぬ

○ひいあ衣

十二

かげふの日記

下の巻

けいへり。やる。らめす。もまくら。がね。と。ほ。や。る。へ。り。の。出

た。まくら。さ。り。る。こ。と。まくら。れ。さ。然。れ。給。あ。り。の。女。く。ま。よ。ひ。ま。人。形。も。そ。の
ら。も。か。と。り。の。ひ。ま。き。ね。ま。ね。ひ。た。り。あ。く。グ。ひ。ど。と。く。ろ。ま。ん。ゆ。

り。う。う。が。と。よ。う。あ。り。け。ん。か。く。ど。う。ら。ん。り。

あ。ろ。ま。く。の。こ。ろ。も。か。ま。に。や。づ。も。も。を。あ。く。あ。く。

ます

え

めら衣。され。う。ほ。ぬ。を。う。ら。あ。く。う。ら。あ。く。に。が。と。も。が。れ

夫

相

我

下交

應

又

かうの裁
かうの裁
按るよかくよまれへん。日記の作者東三條権政兼家の室道綱ア
の母あり。久の寵あくろへたるをあげきし。是等の哥あり。こゝよひの衣と
くろ。今雛形とりふがごとく。ちひとき夜股あるべ。それをニツ道て。や前よ
右の哥を一首づくわにつりて。女神よ進たるより。今世の女の童栗嶋のれ神
を女神うりとて。紙雛ひのま形袖形又ハ浮せ袋。うど猿うど縫。進る。ハ
これらの遺意よやあらん。さすくにこころのもの葉よ。おきままでお弟
うる○栗嶋のれ神サ彦名命ハ高皇產靈尊の指間より。漏墮ゆひ
やどのうひさきぬかくらうれば。雛をたてようるも。うつあまくまくあ
きくとく。

○古製雛圖

此圖おのれが得する摸本と
真物とたゞそろめると
あり。人づくゆゑふともがきの
地日真物をえむじやべー

源氏物語
若紫の巻よ。いはまのうのすあとく。およひのあらびふも。おひいあふづも。
源氏のまことつうじを。まことうあるまこと。おづきゆくとあく。おのうへん。十歳
ちうり。かくとくら。おのうへよづくひのまつうあひ。まこと。これを上にあまくら
されば筆のつひぐん。うよめたつぐん。

寫山樓所藏

○古御衣御冠又一種

十四

四國のうしりに此古御冠のとれ
うへはくじめ意外とて
ありべくすら雅致ゆ
わざれも又珍重し

黄男雛

五シキノ
糸、ぐ



墨ニチ
クロクヌル

女雛



黄

クロキ糸



クロキ糸

○紙玉厚い松竹の繪をあま
丹をまよひうどうかのびて折
たゞくらういろよなとつけとく
とぞれいややねのうとううべ

○室町家の比の雛

十五

白ひら
絹

同背図

時得庵所藏



裙の下
能ります



高サ
三分余

○同女離図



○同背図



離扱の記

全一冊寛延二年印行
伊勢の神宮より昔より女房のりとねび草すよ。小朱

十六

○伊勢の小朱離

離扱の記 全一冊寛延二年印行
伊勢の神宮より昔より女房のりとねび草すよ。小朱
ひのみことらひまき男女乃人形を作り。岐宜とて衣服を身にせ。家基臺乃
上又居坐て。夫婦ひうふに粧ひをなすと。接びと字似く云ふと見えたり。
このれけ本と。伊勢山田の某氏よどひよ。伊勢山田ゆゑに立て傳へ
て。女房平日の離扱びよ。小朱離とそ。又六分許の紙ひみを造り。その衣腹小
もろりのとき。とひゆ一寸許長さニ寸許のちひまきの子あらば紙。
丹青りて文様をひうどり。或ひ行成紙すとをちひまき裁て用ひ。或ひちひ
さきと紅絹のきれすとを添て。衣領つまをとひのふるもあす。とひのふるも
中ひまき一ひらの紙よ。坐敷客間居間墓所など家のよ。一箇をわた。小朱びよ
夫婦。或ひ婢女。奴僕。あらばにくして。そのよ。一箇のあくよ。精一とつじ。並
人家平日のよ。もひまき体をまひびて。常のりとねびよ。まくよ。今

より八十年許前享保の末まじめま車めしが今んたえと小采びみといふ名を
なまあれる人稀なり。年八十余の老人よあへざらかくどと答られり。童乃
りと母びも古ハクと質素すとあり。○源氏の歌かのうへのひいな母びよ。
ちひとき屋形をつらう。ひのみをあとあてりと母び給ひしことあどありひあれ
きれば小米びみ。古の民の童のひよ母びよ。それが享保の末をも傳り
うべ。ひのうりとちひとき義うれば小米びみ。○右の離莊の記。又云「古代の時云々。岐佐宜とりひのを作りゆくと。」古事記傳岐佐宜とりひの
前より神官と。離よ着せらる衣腹を岐宜と名す。岐宜の中の作を
累しこの詞を。○古事記の手間山本の段の岐佐宜のこと
あくべれどひぶこと。岐佐宜の訓。さげう。きさぎ。よんあ。○古事記傳
假字。岐佐宜とりひ見うどを研。削る。今。の言ふこそ。げると
用ふ。○古事記傳。されば離莊の記の説ひのそりひがこと。
ひのうり。○古事記傳。十

今も伊勢の山田あゝし。孩兒小りうどり一物をうとせて。まゝとを。○
又ハ端午の懺。うどをえせて。懺。きくと。の言残す。うらうき衣腹をきく。
めうめう。きと。うらうた物をうと。うの言う。その言義の知れに。

○伊勢小采離莊

伊勢山田の人。年八十余の老女。幼き時ひのみをつらうと。あそび
つらうと。おらえ居て。くよどく。つらうを。得て。よ。大サ五六分。全体紙うり。頭。か。男男女ともに紙ひねり

男離

男ひな

女離

女ひな

○三月三日の離遊

四

古代のひいみをびへ。平日の玩あまし前よりするが如く。三月三日を期とぞ。

づれの比欵詳すべ。塵漆塗囊鈔

文安三
年著

卷之一よ。五節供の事をうるとと

つども。三月の節供の處よ離の本とえざれば。文安の比ひいまご上己の離あひじ

あらべ。又拾芥抄

上之卷よ歲時部

をきめられたれど。上己の離えをと。こゝも塗

の毎日比

世諭問答

よ。民間の年中行事。童子のひを載めひとと。二月

二月の條よ。桃の酒。うさぎの餅。雞合すどのみよそ。ひみねびのみへええと。はいと。天文十二年に續せよ。興局よ。えられたれば。上己の離ひ天文の比も。いまだ

うらしきあらべ。無言抄

離人形の事也

とのみゆりと季をきざめ。雜く離へば脣

天正七年。二とあまうりかうれを記ととあれば。天正の比も。いまご三月三日から

まらしき御幸

す。新を報とと。塔山の井

寛文二
年印行

三月三日の條よ。ひい

まぶたをむける期もむらねば。打まそそく。雜うらべ。云々。但聊むいへらひあくべ。比の俗よ

まそ。浦邊よ。陰陽師をめぐて祓せまそ。船よ。人形をのせて。流を

まそ。今日のひよ。是等を合せ考ふる。三月三日を期とぞ。

往ひしのええ加茂保憲女集

よ。か不ぬまよめきとあひとあぬぐへりとの人

のうちをうらん。あらもられば。上己の祓よ。天兒を水と流せり。もありしらべ。

ともよ古く。源氏物語

次磨の卷よ。源氏須廣へ。左近の時。三月の卯日己の日

も。浦邊よ。陰陽師をめぐて祓せまそ。舟よ。人形をのせて。流を

食を供へ。のろくの凶事を見よ。ひを。かのれくが身を祝ひ。す。古の離ねびの方

よ。かのくがりけそ。

○ちくのひよ。おねびに。外のもの。今。の。

夫よ。ちくがひ。男の外をきよ。女へ。

あま
がつのか
考別よ
あり
るべ

下に
江波第
のとを
セラヌ
合せん
るべ

一家業の事。ひるはおびるをそのまゝおびる。てきれり。別のへんを。本意しておられ。民の童のことを飯へくりおもじられ。また別家内ひつまうき作をうちねび。貢入素をむすとし。美巧をうむじよ。たことぞう。今のおせの女郎の男女のかづらをほくアモ夫婦。どく妻のまゐるごとくおぐまう。そ中昔のひるはおびるをかうひ。伊勢の小糸びるもかうアとひづ。

○唐圓の鏤人

十八

文昌雜錄 卷三十四 唐・歲一時 節一物・云ニ三月三日ハ則右ニ鏤一人ニ云ニ
とあす。歳時節物トヘ。年中行奉
事よりちあるゆくらうがく。
三月の雛。唐土より唐の時をとよみ。文昌雜錄の宋の寵元英が撰されば古書あり。○静序子云諸
眉入勝をひきと譯。たれどもわざらば人勝の婦女がひきと。

○雛繪櫃

十九

寛永より元禄のあひだの繪櫃とも参考する。當時の雛ねりと質素
きりたたら坐上よ愛物。こそゑ盆のそよこ壇をすくうらうとす。 雍列府志貞
三刻。倭俗以紙作ニ小偶人夫婦之形一是謂ニ雛壹對。其外
大人小兒之形各造レ之。女子子並置坐上云。とく。これらより
も知るべし。なし其角が五元集。一段のひる清水坂を目める。とく。発句もあれば。

たとく段をまうけらるもあし。欲享備よりと一段をまうけたる箇あり。下にあらわし
が如一。さて當時ひるの繪櫃とゆふ物あり。その箇をうるて飯櫃形の曲物。と
蓋の方あり。祝ひの絵あり。江戸芝浦明の店番よ賣ち。ぎ櫃とゆふ物。似たる。

一雪が居骨 明晉正業カ
三年 撰中撰正業カ
姉よりひく雛の櫃。さどものアリ。雍列府志卷七

下正一月。兒一女所用

印行の物。高人より桃の節句をうけての絵びつを祝。三日代。嵐雪が其袋

續猿蓑

槐市

が包へ雀子

や

姉よりひく雛の櫃買てこよ雛あそび。續猿蓑。槐市が包へ雀子や

越一杖。羽一子。笄板。上一己所用。板一櫃。云。とくも又え。正徳三年

下

十六日。大

櫻餅

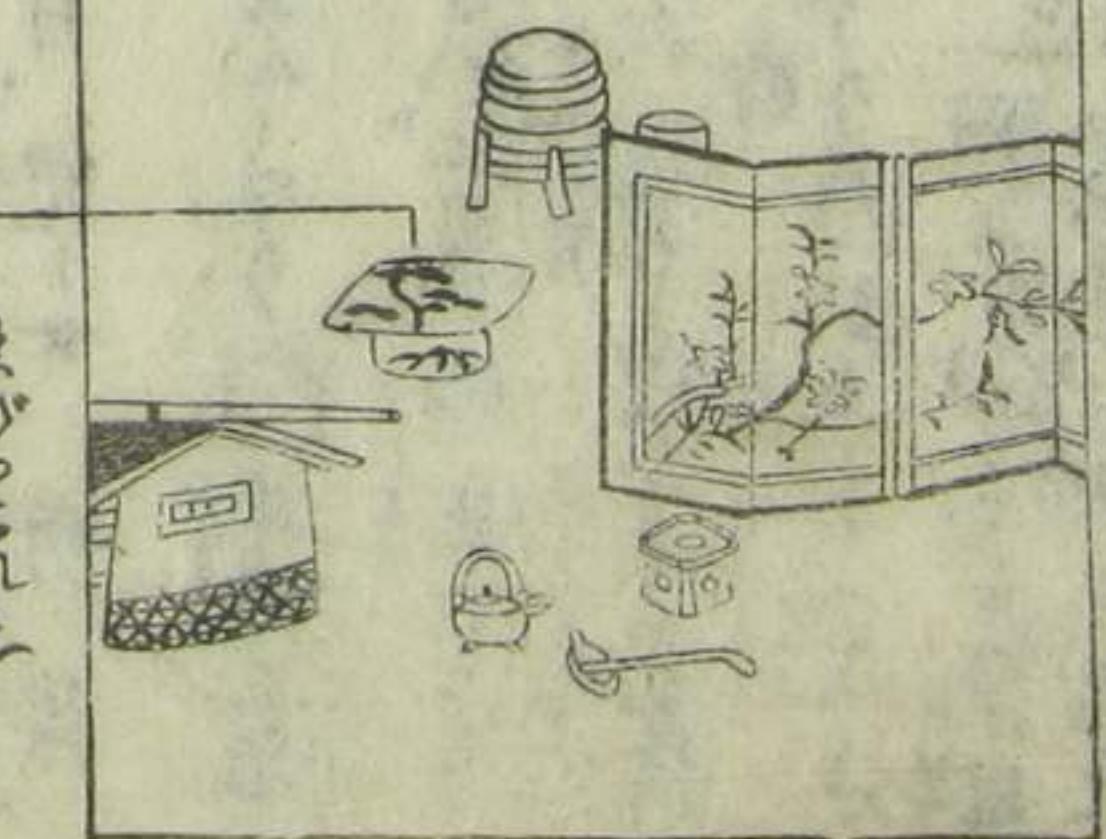
あらい

ひるの絵櫃賣と云ふ。桃の節句をうけての絵びつ」といふ。二月の末。とく。三月のひるがはのよまれば。すまうたの小櫃のゑを。すがり乃からちのく
も。からちも。すがり。うりひとみのくろを。そぞくねとぞりふう。 拙云。すまうたの小櫃
あ。時。櫻ええ。金あるね。おども。べ。ちひさんひよ。絵をうき。在家の賣物。あべ。或說。ま
ま。ひの後。ちひよ。櫻ええ。絵をうき。うらづのりと。おび。ふうる。や。醒。わかれ。小児の絵。りと。お

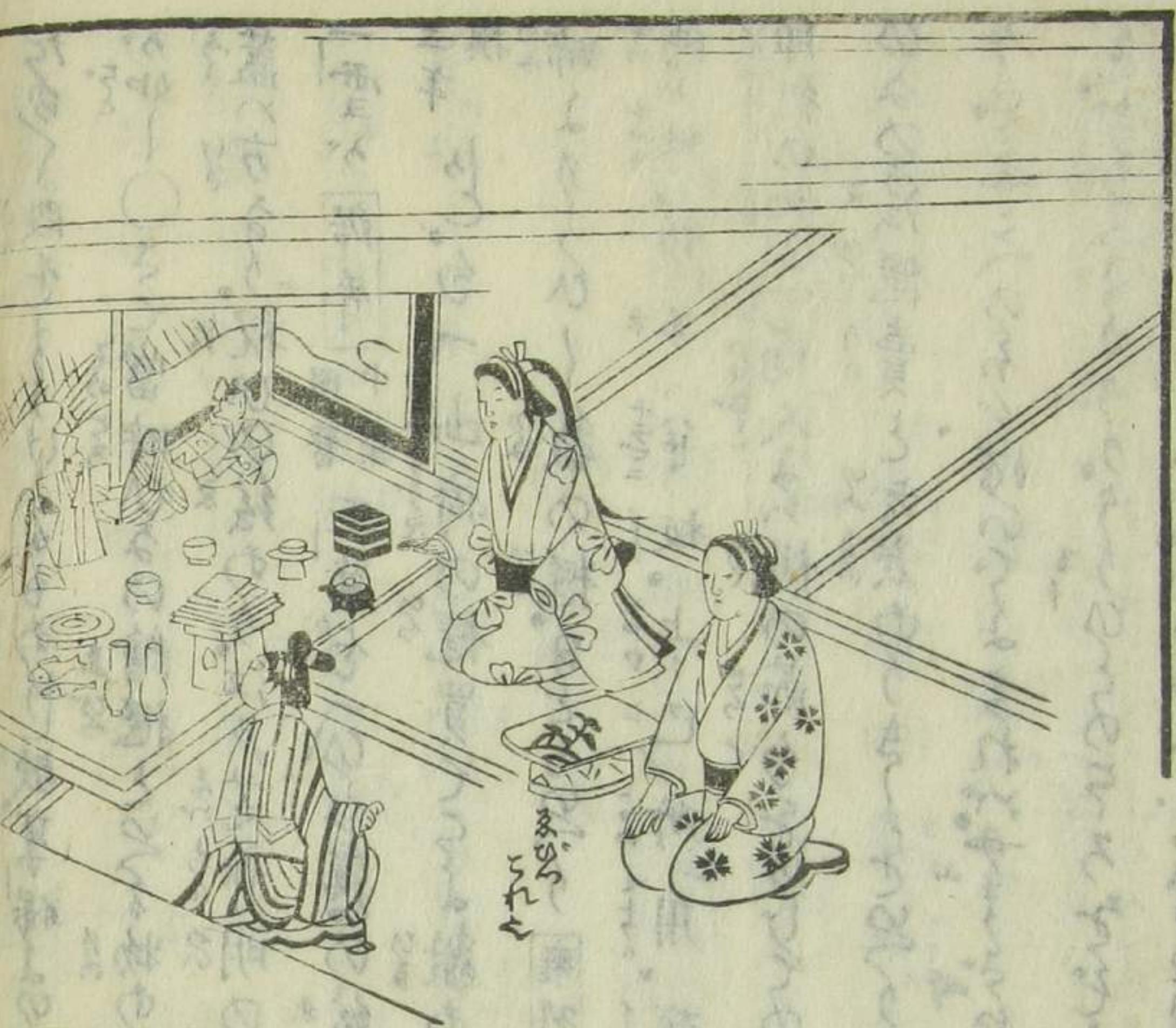
○貞享五年印本 日本歳時記より載る離遊の旨

○元禄元年印本 女用訓蒙旨彙より載る絛櫃の旨

道離具



當時のひよせびへかくのどと
段をもうりどたて空上よ
衣物してどゑあくのまつりわら
よもじーの質素をうべ



○元禄十年印本 鳥居清信より
かりる絛のうちより旨あり

○享保十七年印本
女中風俗玉鏡

載る旨より當時

かくのどとくろくよ
一段をもうりて

○寛延二年印本
離遊の記より
絛ひらの旨



按すよかくのどと
這子紙ひのみよど成
わよえうけとおきへゆよ
上締ひのまよどりひーれ
今ものよをうりといふ言のそれ
矣あをひきあくをなづく
らどそれとの別まるや



諸国奇遊談

寛政十一年刻
一卷

今も洛北の村里より三月の節よりどろへ
呪用ふ予が幼時宝晉のまごとおも

周ひて二月の末より賣ゆりきこと

すよ。今になえてるあらビ。今箇

遠國又洛北の今のか形を

かあるとといひて此箇を出せり。

○醒 按るよ此絹ひづ櫻と菊を

やうる。三月のひよと九月の後のひよとを

よたる絹をばしられ邊世の制さればさうひ。



亨保の比の土離箇

三十

また土をりそぼくと燒て。胡粉丹。緑青。
あどろそぼくと。かのうと。深草を亨保の後の物と見え。

ひの貨夷と
えられり。

男
高サぬ足
五才方

緑青

丹丸

さりを

科の

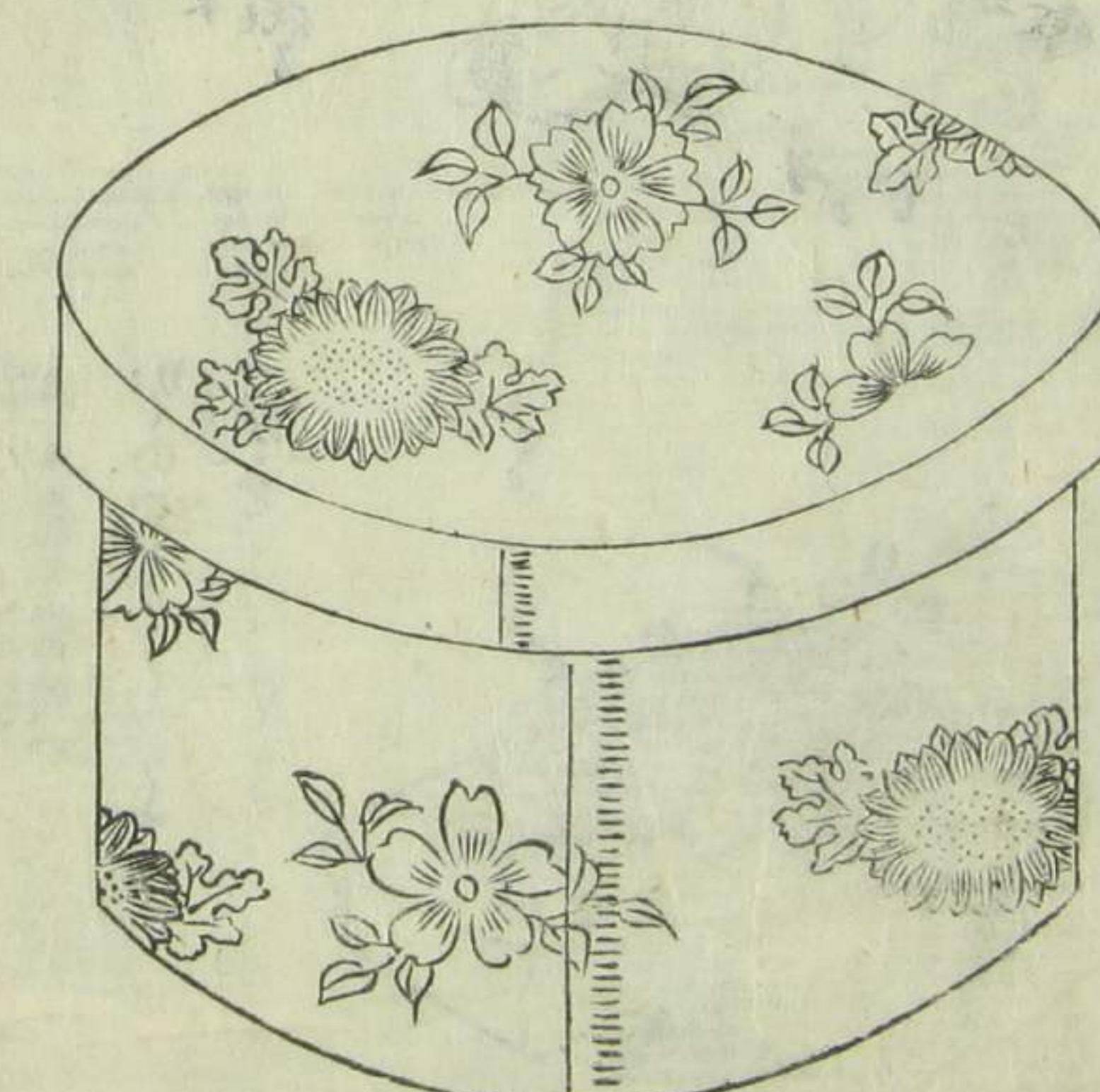
火事

丹丸

尚志堂所藏



今も田舎より女子生れくらの三月の節よりは戸の今戸焼の土ひづの内裏ひづをかうりて
櫻ふと。とくに古谷の田舎よりこれり。奥州の田舎も土ひづをりちらとすん。



○ 離使箇

三十一

物語

あらへ已往

云云

昔

月

云々

天和貞享の比叡川附宜がかけ、
年中行事の印本は此箇あり

女郎離せしとひろをあざり食事をする。
いろくの墨諸道具をかざす。草餅を
ひみの不く入體を湯入。小蛤水を
呑む。節の礼としてひみを杂物より。
様不くねざそ。親類悉くつるひと。是
成人の時奴入して世帯持の誓古あり。
當分のあらびにあらびと云々。かくのつるひとと此箇より
あらび。ひみのつるひとひくの是より。
中の品あらわさるゆめりてことあるべし。
ひみの離みあらはけをめうひたり。今もあら
えぬ節句があらはげをほくまでいもうあり。

○ 本朝食鑑

え福ハ撰

白酒

云々

倭俗三月三日爲節物供離

祭

え福十六年印行

能詰日本國



あら
興味の上のゆりがさき
せら
離のつひの酒の弱足 布名

折敷方三寸三分
ちさ五分

○ 離 挽折敷圖

三十二

挽の挽物の本地あり。折敷ハ片木の
もくのゆきのふを粗糲よほくより。

されも本地より。丹緑青より。松竹の
絵あり。京師より明和安永の比
もあり。後ひつと

かくく。古に物ふことある。
貨素みてく離致あり

挽まサ二寸
一分余
ワタリ一寸
五分
かくくとぞ



京都青李庵藏

○後の離 のち ひよ 三十三

後の離の事古き物よりまとめて。え縁以後の事ありべ
正徳三 年撰 卷十七より云「後の離 のち 九月九日 和國の女兒ひよ拂びをあとより古き物語より出たり。上巳の節より接するより三月の節より記す。今又九月九日より賞する女兒多し。云々俳諧是を名付て後の離とも。其上巳は對して謂る」

晋子十七回 享保八年刻 のち ひよ 三十四 享保八月物の始めとくまき後の離」といふ附合のもの。されば正徳享保の比へどもよめに事。今も京大坂などある。されど三月の如くちるりんあらそ。雛を一つ二つ出でてかくらうる。それもよくてよくあらそとく。吾山が朱ひよさきよりごとの塚よりあらうねえたり○播州室の邊よりハ朔より立る所ありと。或へりと。其実否ひあらば。

姫夙の離 ひめゆの ひよ 三十五

姫夙の漢名を金鶯蛋とり。形鶯の卵より似たればあり。え縁のあ後女兒

これを離よしたと平日にりて拂びたるとありき 雍別府志 貞享三刻 姫夙ハ九條の田間より出。其大きさ如梨。其色至て白し。故に姫を以て之を稱す。女兒斯夙を求り。サ莖を留め。白粉を其面より傳。墨を以て鬢髪眉目口鼻を書き。水引を以て其莖を結び。掲舉て玩具とし。和漢ニ才箇會 卷百 按よ姫夙云々小兒之を取て眼鼻口の状を書き。以て觀じて。故小俗姫夙と名す。今くみたしす

五元集拾遺「千夙やかろひーとも黒き顔」以上二首とも子漢文おとこを書いたる。其角が脚のうちまきあげる。○ふくられのと古たれ事あり 枕ノ草紙より うたひの。ありにゆきたるらごのう 女 と云ふ抄よ「姫夙のゆゑべ」とある。そ古たれを知べ。清少納言此草紙は長徳長保の比のうをかくとすれば。今文化十年より凡八百余年の前。いそへりする。それが近にせまざむある。いやづくく 和泉式部集 異本 「やう形りにくわらひと。いとくううげある人のうねのうねのうねのうねたゞよ。くまつけとへり。我をゑーくあらぶことと

摩マはけろ心のくせもたがひどこれへ凡よのれうきたまへあらでぬの
山城久世丸子云

癖ハシク

二十五

○ひいみ草

今イマのきの女童メガタのみ草シカキを採アヒて離ハリの髪ミツバをやハシ紙シの衣服イフクを着シキせり。

平日ヒナヒの玩アソ具コトとシテ。これハシもシテすシテたシテりあり

丹後守忠教ムサシ医家イカ百首

契タケシ久立クダツ・源仲正ヨウジより

今イマ俗言ノシメルト云ニシメルトニ通ハス

按カタるよ。仲正ヨウジ源二ヨウジ位ヨウジ頼政卿ヨウジの父トトロ。

堀河院ヒラカニの比ヒの哥人ツチヒされば。今文化十一年ヨウジ。かうそ七百
二三十年ヲ前アヘン。こののじつみ草シカキをとりて採アヒたるのあり。彼ヒとちうになれアヒられらアヒらアヒりて
おきよシテ。この民ミンの童トドのひのむ草シカキを採アヒひシテありシテ。古イシテ代イシテの童トドの
おきよシテ。別シテつくシテく賣シテ。ひまつれシテうしゆシテふ。前アヘンよ歩シテる竹チクのたシテひシテ。自然シテよ生シテるめシテ用シテふ。
今イマも田舍シロの童トドへ山ヤマよりのぐうらシロ生シテ。食料シキリョウふもシテうしおシテ。物モノをとりシテとシテ採アヒぶ。つひえシテ。

○筆ヒのつシテよあらシテ。貞享三年著シテ婦人養草シカキ卷シカキ「船ボウよのりの。離ハリ一對イチペアをりて海上シマツシをりく。風波ウネリの
うちシテ。舟ボウ内ナカニ入シテく清水シロをもシテり。」うどシテえだり



骨董集上編下之卷前終

